

開催日時：2002年6月23日（日）14：00～16：50 場所：京都会館第二ホール

1 参加状況

出演者：芦田委員長、寺田委員、池淵委員、嘉田委員、川上委員、遙洋子さん（ゲスト）、
近藤三津枝さん（コーディネータ）

来場者：委員および一般来場者を含め、550名（速報値）

2 シンポジウムの内容

あいさつ

芦田委員長より、シンポジウム開会のあいさつが行われた。

淀川水系流域委員会からの報告

寺田委員より、流域委員会の使命、これまでの活動内容、河川整備の現状や今後のあり方について報告がなされた。

パネルディスカッション

コーディネーターと4名のパネリストで、琵琶湖・淀川水系の河川の現状や今後のあり方について議論がなされた。各パネリストの主な意見は以下の通り。

（遙洋子さん）

生態系のためにも、洪水のリスクを分担しなければならないのは理解できるが、納得はできない。リスクを背負えるのは川を身近に感じている人だけではないか。まずは住民の河川への意識を高めるために、利用しやすく親しみのもてる河川にするのが先決だと思う。

（池淵委員）

自然を制御できない以上、洪水もまた完全には防御できない。このリスクを誰がどの程度負担するのか。洪水に「したたか」に対応するためにも、これからは住民のリスク分担が問われるだろう。

（嘉田委員）

かつて生活のすぐ近くにあった「水」が、上下水道整備等の近代化によって遠くなり、洪水や渇水への危機意識が薄れ、水にまつわる文化も危機に瀕している。週に一度でも川と接することができるようなシステムを作り（例えば河川敷の農園利用）、住民が川との関わりを持つことができれば、洪水や渇水への意識も高まるだろう。

（川上委員）

戦後の河川整備によって、洪水・渇水被害は減少した。しかし、水質の悪化や生態系破壊をはじめとして自然環境は限界にまで追いつめられている。このまま人間中心の河川整備を続けると、取り返しのつかないことになってしまう。

（近藤三津枝さん）

日常生活の中で、私たちの視線が川に向かなくなってしまった。蛇口から川や海が見えるよう、川と人との関係を修復していかなければならない。

このお知らせは委員の皆様にはシンポジウムの結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。